

園内研修と指導計画立案の関係性に関する一考察

入江 礼子・内藤 知美・杉崎 友紀・上田 陽子・丸田 愛子
沼野 ちひろ・平野 真純・塩原 紀子・黒川 愛*

Study on Relations Between In-Service Program For Kindergarten Teachers and Teaching Plan

IRIE Reiko・NAITO Tomomi・SUGIZAKI Yuki・UEDA Yoko・MARUTA Aiko
NUMANO Chihiro・HIRANO Masumi・SHIOHARA Noriko・KUROKAWA Ai*

Abstract

Kindergarten Department has been continuously having in-service program for kindergarten teachers since April 2001, focusing mainly on weekly and daily teaching plan. We had revised the plan 2 times by last year, but these revisions were made in a top-down manner. Entering our third year, the revision was suggested for the first time bottom-up by one of our teachers. Three things became clear as a result.

1. Now that we have "Weekly Objective and Details", "Collaboration with Other Teachers", "Events and Flow of the Day" columns in the plan, it is easier for us to think about the direction we head to during our in-service program for kindergarten teachers.

2. Each team can consider above issues prior to the in-service program for kindergarten teachers, which enables them to think of their opportunities before the program starts.

3. Flow chart in the plan will be written by each teachers, which will allow them to put specific challenges that they face at the moment, and also make it unique.

Keywords: in-service program for kindergarten teachers, teaching plan (weekly and daily plan), Flow chart
キーワード：園内研修、指導計画（週日案）、環境図

1. 研究の目的

鎌倉女子大学幼稚部（以下幼稚部）では2001年度より幼稚園教育要領を基本に置きながら、「遊びを中心とした保育を展開し、一人ひとりの育ちを理解した環境作りを行う」ことを目標に保育の見直しを行うこととした。保育の見直しの際に園内研修を行うことが保育実践上有効であることを示した田中他（2000）ⁱ、長山他（2000）ⁱⁱ、岸井他

（2000）ⁱⁱⁱ、青木（2000、2001）^{iv}等の先行研究に鑑みてのことである。幼稚部での保育の見直しは部長・次長のトップダウン形式で始まり、園内研修をその核に据えた。そこでは指導計画（以下週日案）の検討を主とし、週1回定期的に継続している。その初期のプロセスは「園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相」（入江他2002）、および「異年齢保育を支えるティーム保育の検討

* 山口大学大学院

—指導計画の変容を手がかりとして—(入江他2003)として本学紀要に発表した。園内研修における週日案の検討は必要に応じて週日案そのもののフォームの改訂にもつながっていった。さらに保育の見直しを始めて3年目に入った今年度1学期、新たな週日案への改訂が担任保育者からのボトムアップ形式で行われた。幼稚部では園内研修を継続する間に週日案の改訂を三度行ったことになる。このように幼稚部にとっては園内研修と週日案の改訂は深い関係性をもっている。一方、園内研修と指導計画立案の関係性を取り上げた研究は過去にはほとんど見当たらない。そこで今回は今までの研究過程を踏まえて、新たに改訂した週日案のフォームの構造と園内研修の関連性に検討を加えたい。

2. 研究の方法

(1) 方法

幼稚部園内研修議事録と各担任の提出した週日案を資料としての検討と分析。

園内研修は原則として週1回月曜日の保育終了後行っている。メンバーは幼稚部の全職員(2003年度は部長・次長・担任保育者5名・フリー保育者1名)。担任保育者から出される週日案の検討を軸に全メンバーがその時々で取り上げたい話題(行事の打ち合わせを含む)を中心に話し合い形式で進める。その内容を議事録として残す。

(2) 期間

2001年4月～2003年10月

(3) 幼稚部のプロフィール

① 幼稚部園児数および担任数

表1

	3歳児 (担任数)	4歳児 (担任数)	5歳児 (担任数)
2001年度	6(1)	28(2)	26(1)
2002年度	12(1)	16(1)	27(2)
2003年度	20(2)	31(2)	22(1)

② 一日の流れ(2003年10月現在)

表2

一日の流れ(2003年10月現在)

8:40～9:00	順次登園(含バス登園)(出席ノート、荷物の始末、着替え等)その後、保育者の環境設定のもと、自由な活動及び保育者の設定した活動
11:00	片付け お弁当
11:30	その後自由な活動あるいは保育者の設定した活動
13:00	片付け 帰りの集まり(週1回の絵本の貸出しを含む)(今日の話、絵本、手遊び、歌ダンスやゲーム等)
13:20(30)	
13:50	着替え
14:00	降園

(3歳児と4、5歳児では若干の違いがある)

3. 週日案フォームの変遷

2001年度より2003年度10月までの園内研修と週日案のフォームの変遷を時系列で辿っていく。

(1) 週日案I

・保育を見直すこと

2001年度は大学児童学科教員2名が部長・次長として幼稚部に着任した¹⁾。他の主任、担任教員に移動はなかった。主任(50代)は他園での保育者歴が12年、幼稚部での保育歴が7年のベテラン保育者。担任は他園経験なしで幼稚部での保育歴が7年(30代)、5年(20代)、3年(20代)、2年(20代)であった。幼稚部ではそれまで指導計画を立てることはあっても園全体で検討するということは全くなかったという。また決まった指導計画のフォームもなかった。そこで2001年度に使用する週日案のフォームは部長・次長からのトップダウンの形式で提案された²⁾。週日案Iである。この年度にはこれ以上のフォームの改訂はなかった。しかし園内研修時に検討を続けた結果、その内容についてはいくつかの改訂を行った。まず「環境図に子どもの位置・活動・関わりを入れたこと」である。これはいくら週日案を書いても、そこからあまり子どもの姿が読み取れないことか

ら加えることになった。次に保育実践後の検証をする必要性から「先週の子どもたちのとらえと反省」を入れ込む努力をすることとした。これが保育後の反省が週日案立案の際に重要であることが保育者に意識されるきっかけとなった。しかし保育実践の改革という意味では保育室のしつらえにしても、保育後の準備にしてもさしたる変化はなかった¹⁹⁾。

・ 従来の保育をこわすこと

夏休み中の園内研修では各保育者から今までの自分たちが行ってきた保育についての内省が行われ、これが9月以降保育後記録を書くきっかけとなった²⁰⁾。さらに10月に入っての園内研修の場で自分の今までの幼稚部教諭としての歩みや悩みが吐露された²¹⁾。その後保育者たちは今までの保育の枠にとらわれず、恐れずに試行をはじめようになった。お弁当を保育室以外の場所で食べたり、3・4歳児がクラスを越えて混ざり合ったりというように一日が子どもの遊びや生活の流れに沿って進む場面も出てきた。また、今まではほとんど用意されていなかった保育素材が子どもの手の届くところに用意されるなど、環境面の変化が顕著に出てきたのもこの頃である。子どもを主体にした保育にとっては当たり前といえるこれらの事柄も幼稚部においては以前の保育を壊すという意味を持っていた。動き出した子どもたちの状況からも保育者がこの状況を支えるためにチーム保育を行う必要性も感じ始めた²²⁾。

(2) 週日案Ⅱ

2002年度に入り保育者が入れ替わった。3年目の保育者の後任として他園経験3年（そのうち1年は保育所での経験、20代）の保育者と大学院修了の新任（20代）が着任し、さらに担任経験4年と障害を持つ子どもの保育経験が4年のフリー保育者（40代）が加わった。また昨年度の反省を踏まえて、より見通しを持って保育活動ができるように週日案を新たにした。これも部長・次長からの提案である。この週日案の項目は「幼児の姿」「週のねらい」「内容」「環境の構成」「環境の見通し」「援助」「反省・記録」「保護者との連携」「他

の保育者との連携」と多岐に及んだ²³⁾。週日案Ⅱである。

この中で大きな変更点の第1は「反省・記録」欄を設けたことである。2001年度半ばから保育後記録を別立てで書いていたが、これを週日案に入れ込んでしまおうというものである。しかし実際には記録の部分は保育後に書き込むことになるので月曜日の園内研修の折にはその部分は空白で、更なるその記録を次の園内研修で検討できるだけの時間を捻出することができなかった。そのため週日案のなかには計画・実践・記録がありながら思ったようには機能しないことがわかった。第2に環境図を独立させ、B5サイズにしたことである。第3は2001年度より顕著になってきた異年齢の交わりを支えるためにチーム保育の必要性が改めて認識されたため、これを支えるためには「他の保育者との連携」欄が重要であるのでこれを入れ込んだ形にしたことである。この週日案Ⅱも部長・次長の提案という形で改訂した。

しかし実際にこの週日案Ⅱを使用した結果、「他の保育者との連携」欄が書式の一番下にあったためか、あるいは担任保育者たちにはこの連携の重要性が認識されていなかったためか、この欄が書かれることはほとんどないことが話し合われた²⁴⁾。

(3) 週日案Ⅲ

・ 異年齢交流を支える

週日案Ⅱがうまく機能していないことが園内研修で話し合われ、部長・次長の提案による週日案Ⅲとして改訂することになった。項目は「先週の幼児の姿」「週のねらいと内容」「予想される子どもの姿」「環境図（人的環境・物的環境・配慮・子どもの動き）」「他の保育者との連携」「行事および一日の流れ」とし、「保育後記録」は「週の記録」として切り離れた。また今まで独立させていた環境図を再び週日案のなかに組み入れた。これは環境図が独立しているとかえって見にくいことがわかったからである。さらに「他の保育者との連携」欄を週日案紙面の中心に近い位置に持つてくることでこのことが意識されるように配慮し

た³⁸。この時期の保育実践では保育者の意図を持った、あるいは子どもたちの自然な交わりによる異年齢の関わりが増えたこともあり、保育者間の連携の必要性も高まったことを考えてのことである。

「他の保育者との連携」欄は実際には保育者が協力して行わなければならない作業の確認や子どもたちの保育に関して確認しておきたいこと、さらに共通に使う場所についての提案や確認が記されていた。園内研修時に口頭で発言されるだけではなかなか共通認識とならなかったことが、こうした作業を通じて共通認識されるようになっていった。また特に園内研修の時には発言が少なくなりがちな若手保育者からの提案がこの欄に書かれることが多くなった。

(4) 週日案Ⅳ

・チーム保育をめざして

2003年度に入り、保育者が大きく入れ替わった。主任と保育歴9年の保育者が去り、4月からは他園で4年の保育歴を持つ保育者(20代)と、大学(20代)および大学院(20代)を修了した新任の保育者が加わり、保育者の平均年齢は一気に若返った。幼稚園での経験ということでは保育歴6年目の保育者(20代)が一番長く、その次は部長・次長で3年目、他に2年目かフリーの保育者を入れて2人、新任が3人という保育者集団となった。

2002年度から特に異年齢交流を支えるチーム保育の検討を続けてきたが³⁹、2003年度はこれを一步進める形で担任が複数の学年はチームで考えていくことを打ち出した。今年度は9月に園舎移転が決まっており、その後はクラスのしつらえも学年ごとのオープンクラスにする予定であったので、4月からその体制に向けての準備を進めた。しかし週日案の中にその話し合いの結果が積極的に生かされることは少なかった。

・担任保育者からの週日案改訂の提案(環境図を自分たちで)

園内研修も今までどおり月曜日に継続的に行っていた。週日案Ⅲはとりあえず2003年度当初は改訂することなく使うこととした。1学期初めの慌しさが一段落し始めた5月半ば過ぎ、保育歴5年目で

幼稚園では新任の中堅保育者と新任保育者の2人を中心に週日案を改訂したいと提案があった。週日案改訂の提案が担任保育者からあがったのは初めてのことである。理由は以下の内容であった。「着任して1ヶ月半、週日案Ⅲのフォームを使ってみたが、書くのに時間がかかる割には使いにくいので変えたい」「具体的には環境図を書く際には先週の子どもの姿も今週の予想される子どもの姿もすべて考えている。すべては環境図に書き込むことが可能なので、週日案Ⅲにある、『先週の子どもの姿』欄、『予想される子どもの姿』欄、『環境の構成と保育者の援助』欄を削除したい。」(2003年5月23日園内研修議事録より)

担任保育者から積極的に週日案のフォームを変えたいという意見が出たのでこれを取り上げた(図1)。そして話し合いの結果、次週からは環境図のスペースを大幅に増やし、それぞれが自分にあった書き方で書くこととした。園での統一したフォームはその後の検討課題となった。

・共通項目の確認

改訂に伴ってそのまま残す共通項目を確認した。その結果「週のねらいと内容」欄、「他の保育者との連携」欄、「行事と一日の流れ」欄を残すことになった。またこれらの項目の紙上比率は各担任に任された。

4. 週日案Ⅳの特色

週日案のフォームがトップダウンのお仕着せではなくなってから、担任の工夫が随所に見られるようになった。その主な項目を挙げてみると以下のようなになる。

①「保育者の課題・目標」

新任保育者Aから出された項目(2003年5月26日付週日案)である(図2)。週日案立案の際に自分の課題や目標が意識されていたことがわかった。この項目は園内研修を続ける中で意識の強弱はあるもののすべての担任に取り入れられるようになった。

②「子どもたちの気になる事項」

同じく新任保育者Aから出された項目(同年7月7日付週日案)。この項目は他の保育者

に「子どもの様子」などの項目に形を変えて波及した。

③「子ども関係図」

中堅保育者 B から提案されたもの。この関係図は3歳児、5歳児の担任に波及し何回も繰り返して使われている。担任にとっては子ども同士の関係を図式化してつかんでおくことが保育を組立てていく際にかなり重要なポイントとなることがうかがわれた(図3)。

④「子どもの様子」「クラスの様子」

中堅保育者 C (4歳児担任) から提案された項目。4歳児の担任は関係図ではなく「子どもの様子」という項目立てをしている。関係性より子ども個人に注目した項目立てといえよう。

⑤「クラスの目標」「クラスの課題」

経験2年目の保育者 D (5歳児担任) から出された項目。特に3歳児、5歳児の担任が時に応じて使うようになっている。

5. まとめと考察

週日案を作成することは担任保育者にとっては次週の保育をシミュレーションすることである。日々の保育に追われている保育者にとってはいかに少ない時間で的確にシミュレーションできるかが重要な課題となる。自分たちの提案した週日案 IV を使用するようになってからチームを組んでいる同じ学年の保育者が金曜日に次週の保育について打ち合わせをする姿も目立ってきた。また園内研修の回を重ねるごとに保育者の個性の表れた週日案が提出されるようになった。これらのことが顕著になってきた原因は実際に立案する担任保育者からの提案を全面的に取り入れたものにしたためと考えられる。

この週日案 IV の特徴を挙げると以下の3点なる。

- ① 園全体で共通に書く項目を「週のねらいと内容」欄、「他の保育者との連携」欄、「行事と一日の流れ」欄としたため園内研修の際、園としての方向性が検討しやすい。
- ② 上記の欄は各学年のチームであらかじめ検討することができる。そのため園内研修以前に各学年の課題を決定できる。

③「環境図」欄は各担任保育者に任されている。

ゆえにこの欄に保育者自身時々の課題や個性を入れ込むことができる。

週日案 IV は保育者個人として、保育者チームとして、また園全体としての課題に取り組めるポテンシャルを持つ形態といえる。この形態にたどり着いたのは前述のように担任保育者が週日案を自分たちの使い勝手のよいものにとしたいと声を挙げた結果である。①～③の特徴を持つ週日案は園内研修の折に全体で検討すべき内容がコンパクトにまとめられているため、比較的短時間に話し合うことができる。日々の保育に忙しく、時間を多く捻出できないときには、この部分の検討のみでも園としての共通合意を作りやすい。また「環境図」欄の検討は各保育者がそれぞれに時間を作って読んで了解することも可能になるということがわかった。また「環境図」に書かれた検討したい問題を特化して話し合う道も開いたといえる。

6. 今後の課題

現在の幼稚部の園内研修では週日案の全体の共通理解しておかなくてはならない部分の検討に終始してしまうことが多い実情がある。時間的には効率化が図れるようにはなっている園内研修ではあるが、共通理解に終始している感も否めない。今後は保育者個人の課題や育ちが入れ込まれている「環境図」欄を詳細に検討することで、もう一步保育者としての育ちの検討に踏み込んでいきたいと考えている。

(引用・参考文献および脚注)

- i 田中三保子他「連携を軸に保育の要点を探る」日本保育学会第53回大会研究論文集 pp. 324-325 2000年
- ii 長山篤子他「園内研修(1)―園内研修と保育のかかわり―」日本保育学会第53回大会研究論文集 pp. 318-319 2000年
- iii 岸井慶子他「園内研修をめぐって(その2)―ビデオ観察を通じた共同研究について―」日本保育学会第53回大会研究論文集 pp. 160-161 2000年
- iv 青木久子「保育の閉塞状況を開く試み―混沌に潜む対話への芽―」日本保育学会第53回大会研究論文集

pp. 124-125 2000年

青木久子「保育の閉塞状況を開く試み—学習内容はどこから生まれるか—」日本保育学会第54回大会論文集 pp. 268-269, 2001年

v 入江礼子他「園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相—特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として—」鎌倉女子大学紀要第9号 pp. 3-5 2002年

vi 入江礼子他「異年齢交流を支えるティーム保育の検討—指導計画の変容を手がかりとして—」鎌倉女子大学紀要第10号 p4 図3 2003年

vii 同上 5pp. 3-5

viii 同上 5pp. 5-6

ix 同上 5pp. 6-7

x 同上 5pp. 7-8

xi 同上 6 p5

xii 同上 6 pp. 5-6

xiii 同上 6 p6

xiv 同上 6

要旨

幼稚園では2001年4月より週日案の検討を中心に週1回の園内研修を継続している。昨年度までに2回改訂を行ったがいずれもトップダウンによるものだった。3年目に入った今年度、週日案のフォームの改訂が担任保育者からボトムアップの形で提案された。その結果3点のことが明らかになった。

- ① 園全体で共通に書く項目を「週のねらいと内容」欄、「他の保育者との連携」欄、「行事と一日の流れ」欄としたため園内研修の際、園としての方向性が検討しやすくなった。
- ② 上記の欄は各学年のティームであらかじめ検討することができる。そのため園内研修以前に各学年の課題を決定できる。
- ③ 「環境図」欄は各担任保育者に任されている。ゆえにこの欄に保育者自身時々の課題や個性を入れ込むことができる。

(2003. 10. 21 受稿)

